哲學研究　第百六十四號　第十四卷　第十一册

プラトンのイデアに就いて

杉　正　俊

目　次

一　哲學の問題
二　パイドン、ポリテイアの形相説
三　その難點
四　改造された後期の體系
五　ピレボスの存在論
六　ピレボスのイデア
七　エイドスとイデアとの區別、眞のイデア

序

普通プラトンの思想と稱せられて居るものは、主としてパイドン、ポリテイアの所

說であるが、そこには尙先師ソクラテスの影響が强く、且又その思想は豐富なる詩的想像力に覆蔽されて居る。それ故彼の獨特の思想を掴み、その正しき理解に達する爲には、後期諸研究を充分に重んずるのみならず、彼の異なる思索の斷片を結付ける糸を發見し、その思想が如何に發展したかを見ねばならぬ。

一

プラトンの哲學研究は、ソクラテスの方法を承けて、課題・τί ποτ' ἐστιν; に始まる。我々は彼の對話篇の殆んど悉くが此の探究である事を見出すであらう。[1]

實際、πολύν τε ἐστιν; と區別されて此の設問が彼の關心の中心であり、彼の哲學を動かした主要契機であつた事は否まれない。前の設問が性狀(πάθος)を尋ねるに對し、後の設問は本質(οὐσία)を問題とし、定義を探究する。[2] 而して、それに提出された解答の形が有名な慣用句 „αὐτὸ ὅ ἐστι"[3] であり、バイドン、ポリテイアの形相說は之を解明した典型的のものである。

「註」プラトン著書中よりの引用箇所は、バーネットのプラトン全集所示の、ステフアヌスの頁數に據る。

(1) τί ποτ' ἐστιν, τί ποτ' εἶναι ἐν. 等が代用されて居る所もある。

a) Laches; 190 b-c, 191 e-192c. (主として勇敢の τί ἐστι;)

b) Charmides: 159a, 160c. (節度)

c) Protagoras; 312c–e, 330c–d. (ソクラテス)

d) Euthyphron; 5d, 6e, 10a, 11a–b. (敬虔・不敬虔)

e) Menon; 71a–b 72b–d. (德)

f) Symposion; 201e. (愛)

g) Phaidon; 64c. (死)

h) Politeia; 331c–d. (正義) 506a (善)

i) Theaitetos; 146e, 151d, 164c, 182e, 196d, 200d. (知識)

j) Sophistes; 217a–b. (ソクラテス) 239d. (映像) 237c. (非有) 243d–e, 246a. (有=ἰσχύ, ἔνεστι)

248b. (κοινωνεῖν) 260a–e. (ロゴス)

k) Philebos; 13e. (善)

(2) Euthyphron 11a, Symposion 201e. Theaitetos 147a–b, 196d–e.

尙アリストテレスは形而上學(H. 3, 1043b 24ff)に於て、『アンティステネス及かゝる無教養(アパイデウトイ)の人々は「τί ἐστιν;」は規定出來ないで ποῖόν τι ἐστιν; のみが説明され得る」とした。從つて彼等の所謂定義は冗長(マクロロゴス)であつて本質に關しない。』と云つて居る。同書 1024b 29–34 及 Theaitetos 201e–202e, Sophistes 251aff. 參照。

(3) „ὁ ἐστιν" „ἐνὸ τί ἐστι" „τὸ τί ἐστι" なども交替されて居り、所謂極印づけられた(ἐπισφραγίζεσθαι—Phaidon 75d)形式である。Kratylos 389b, Symposion 211c, Phaidon 65d$_{15}$ 74b–75d, 78d, 92d. Politeia 507b 479dff. 597a,c. Parmenides 129a, b. ff.

二

凡て、同じ名稱で呼ばれて居る個物の多の、存する所には夫々一のエイドスを定立

する事を常とする。[1] かゝるエイドスは永遠不變、常に同一なるものにして、それ自體に於て(αὐτὸ καθ' αὑτό)ある。[2] 而して各個物が其もののであるのは、其の中に同名のエイドスが臨在(παρουσία)するによる。卽、エイドスは個物の αἰτιὰ τοῦ τί ἐστι[3] であつて個物はエイドスを俱有(μετεχειν)する事によつて其ものとなる。美しきものは美のエイドスを、大なる者は大のエイドスを、小なるものは小のエイドスを俱有する事によつて美しき者、大なる者、小なる者となるのである。[4]

斯くして此の時期に於けるプラトンは我々の對象界をエイドスと個物、あるもの(ὄν)と成るもの(γιγνόμενον)、可想界(νοητόν, νούμενον)と可視界(ὁρατόν, φαινόμενον)とに分離、峻別し[5]前者を後者の根據と考へて居たと解せられる。

註

(1) Politeia; 596a.
(2) Symposion; 211a-b. Phaidon 78d-80b. Politeia 479a. Phaidros 247c-e.
(3) Aristoteles; Meta physika A, 6, 988a10-11
(4) Phaidon; 100cff. 勿論かゝる論は後期に於ては影を沒して居る。H. Raeder; Platons philosophische Entwickelung s. 372. 參照?
(5) Politeia 507b-511e, 524c, 534a.

三

併し此の形相説には幾多の難點を伴なふ。我々は之を指摘論難する前に先づプラトン自身に隨つて其のアポリアを見極めよう。[1]

(A) 我々が同じ名稱を負はせる各種、多に就いて各、一のエイドスを定立するとせば、凡ての個物に相當して夫々そのエイドスがあるのであるか。數學的、美的、倫理的なるものゝ外に物理的、生物的、人工品的、乃至は反價値的なるエイドスありや。[2] 我々及び我々の如くあるものを離れて(コーリス)、人間、火、水、のエイドスありや。更に毛、泥土、汚物、其の他最も無價値、劣惡なるものゝエイドスありや。若し然りとせば、エイドスとは單に感性的事物を説明する爲に、それに相當するものを、それに等しい數だけ、超越界に定置したに過ぎず、斯くては無意味の深淵に(εἰς τινα βυθὸν φλυαρίας)陷る外はないであらう。[3]

(B) 次にパイドン後半に於て普遍的本質としてのエイドスは物の性質の原因と考へられ、之を俱有(メテウクシン)する事によつて雜多は夫々其の名を得て其ものたり得ると説明された。併し反對の性質と結合する事なくして永遠にして不變なるエイドスは如何にして個々の物と結合する事が出來るか。如何にして個物はエイドスを俱有する事が出來るか。若し出來るとせば一なるエイドスの(α)全體をか。(β)一部分をか。

(α)若し一(μονάς, ἕνας)が全體のまゝで無限なる個物に臨在するとせば、それは自分自身を離れる事となり、エイドスたる事を奪はれねばならない。何となれば一なる者が同じものであり乍ら同時に一(ヘン)と多(ポラ)との中にある事は就中不可能な事であるから。(β)又一の帆が多くの人を覆ふ時各人の上にあるのは其一部分に過ぎぬが如くエイドスが部分的に雜多に分有されるとせば、それは最早一である事は出來ない。更に其結果、大自體の一部分(それは全體としての大自體より小である)を俱有する事によつて大となるが如き不合理及其他の不合理が隨生する。[4]

而して又雜多が共通なる述語を俱有する事を說明する爲に一のエイドスを要求するならば、此のエイドス自身と個物とが共通述語を俱有する事を說明する爲にも一のエイドスを要求せねばならぬ。例へば大自體が他の多くの大なる者と齊しく大である以上、之等がよつて以て大である所の第二の大自體を要し、斯くして無限に進み得るが故にエイドスは最早、初に定立した如く一である事は出來ない。[5]

以上、俱有說に對する困難は屢先人によつて明示された如く、單に詩的な比喩(ποιητική, μεταφορά)として、(パイドンに於てさえ用語の適當さを疑ひ乍ら逡巡を以て)[6]提出されて居る・μετέχειν・なる語が文字通りに「分ち有つ」と、空間的意味に解釋された所か

ら由來して居る。卽、ἀσώματά καὶ νοητὰ を σώματα μὴ ἀισθητά に、自己原因的にして不可分な單姿（ἀμέριστος μονοειδής）を他原因的にして分割され分有され得る多姿（μεριστὰ πολυειδῆ）に其意味で現實のものと異ならぬ樣に解し、それによつて個物との關係を理解せんとした結果に外ならぬ。

(C) 最後に形相說の有する困難の最大なるもの（μέγιστον）はエイドスの不可知なる事である。夫々のエイドスを一として ὄντα から切離し、夫自體に於て（αὐτὸ καθ' αὑτό）あると定立するならば、それは最早我々に於ては（ἐν ἡμῖν）あり得ない。從つてエイドスは相互關係に於て其の本質（ウーシア）を有し、我々のものとの關係に於て（πρός τὰ παρ' ἡμῖν）ではない。主人自體は奴隸自體との交涉を持つが特殊な奴隸とは關係しない。或人は他の人の奴隸又は主人ではあるが、主人自體、奴隸自體のそれ等ではない。同樣にエイドスは知識自體にのみ關係し我々に於ける知識とは無關係である。斯くしてエイドスは縱あるとしても、我々人間的本性によつて（τῇ ἀνθρωπίνῃ φύσει）は認識され得ない。[8]

以上、エイドスが不可知なりとの歸結は正に正當なるが如く思はる。併し事物の εἶδη がある事を許さず又個物に屬するさをエイドスと規定しないならば、事物（オンタ）常

に同一なる *ἰδέα* がある事を許さぬが故に人は悟性(ディアノイア)を何處にも向ける能はず、從つて *διαλέγεσθαι* の能力(ディナミス)は崩壞し終るであらう。[9]

今我々は哲學の運命に拘はる此重大な二律背反に遭遇して、決して狼狽してはならない。我々は唯「ソクラテスの遺鉢を繼いだプラトンが果して此結論の默許に堪へ得たであらうか。」と自問して見ればよい。[10] ジャックスンも云ふ如くプラトンにあつては叙述に空隙ある場合、通常一二の含蓄的な示唆が與へられて居るが故に、我々はプラトンがエイドスの不可知を默認したと早斷する前に今一度、此の節を讀返す可きである。仔細に檢する時、人は一の解決が暗示されて居る事に氣附くであらう。[11]

プラトンにとつて悟性の對象たるエイドスを樹立し事物(オンタ)を類に別けて (*κατ' εἴδη*) 考察する(ロゴス與受(ドウナイ・デキサスタイ)の)方法(*μέθοδος*)・ディアレクティケーは實に第一のもの(*πρῶτον*)であり、其尊重は絶對的命令である。[12] エイドスの拒否はロゴスの否認であり、ロゴスの剝奪は最大(メギストン)の事、哲學の剝奪なのである。それ故彼は「*ὄν*」の絶對性を固執して知識、理知を覆沒する人に對しては飽く迄も戰はねばならぬ」と主張する。[13]

註

(1) パルメニデスの前半(及びソヒステスの一部)は明かにパイドンパルテイアの教説の批判である。

H. Jackson; Plato's Later Theory of Ideas (Journal of Philology vol. p. 253ff. XI X. p. 287 ff).

H. Raeder; Platons Philos. Ent. S. 299, 302, 305, 308, 336.

J. Burnet; Greek Philos. part 1. (Thales to Plato) p. 236. 254, 260.

(2) Kratylos, 389b Politeia 596c, 597c.

(3) Parmenidhs, 130c-d, Aristoteles; Meta physika 990b1-17参照。尚同書(A. 1070a 18-19)に『プラトンは自然物があるだけのエイドスがあると言つた。』と記されて居る事からシキックスンは『後期に於てプラトンはエイドスを自然物にのみ制限した。』と主張するのであるが、之に對する反駁は容易である。

W. Ross; Aristotle's Metaphysics I p. 192, 199. 及び Introduction xlix-I. H. Maier Sokrates S. 573 参照。

(4) Parm. 131a-e, Philebos 15b.

(5) Parm. 132a-b 又ピタゴラス學徒の如くエイドスを原型(パラデイグマ)とし μέθεξις とは類似(ミメシス)に外ならぬと考へても同じ困難に陥る。(132d-133a)

尚此の難點に關しては。 Politeia; 597c-d.

Ross; Aristolte's Meta. 1 p. 195-5. J. Burnet; G. P. I. §196.

A. E. Taylor; Plato, The Man and his Work, p. 355-8.

T. Maguire; The Parmenides of Plato. Appendix B. (p. 103-4) 参照。

(6) Aristoteles; Meta physika A. 991a, $_{22}$. Phaidon 100d $_{5-8}$.

(7) Aristoteles, Ibid. M. 107b$_{20}$. Sophisths 246a, 247d.

(8) Parm. 133b-135a. 之は明に Symposion 211a-b, Politeia V 476e-480a, Phaidros 247d-e 等の教説の批判である。

(9) Parm. 135b.

(10) H. Cohen; Platonische Ideenlehre psychologisch entwickelt. (H. Cohen Schriften z. P. u. Z. s. 71) 參照。

(11) Parm. 135a-b. 尙、茲に注意すべきはパルメニデスの後半が前半の途絕(アポリア)に對して解決の鍵を與へる等と考へてはならぬ事である。何となれば其の假說 εἰ ἓν ἔστιν, ἓν εἶναι ἔστιν (ソピステス 244b-245d, は之を簡約せるもの)は共にメガラ學派のものであり、メガラ派の假說を正當に追求する時は自說以上に奇妙(アトパ)な、より笑ふべき(ἔτι γελοιότερα 128d)歸結に陷る事をプラトンが皮肉にもゼノンのディアレクティケーを用ひて演示したに過ぎぬと解すべきである。

Burnet; Greek Philos. I. §198, §199, §202.

A. E. Taylor; Plato-The Man and his Work, p. 350-352, 360.

Raeder; Platons philos. Ent. s. 299. 309-10, 317, 336.

H. Maier; Sokrates, s. 563, 566. 參照。

ロス(Aristotle's Meta. I. p. 195) も『パルメニデス篇で、プラトンはイデア說改變の必要は認めたが、其方法(τὸ ἄλλο εἶδος ἐπιζητεῖν ὃ μεταβαίνει-133a)は見出さなんだ。』と云つて居る。私はパルメニデス全篇は叡智界のみを取らば現象界(テアイテイトス前半に於ける)と同樣に不完全なる事を示し、プラトンがこゝから後期諸研究に出發したのであると思ふ。

(12) Politikos; 285a-286e. (Theaithos 202e, 175b)

(13) Sophistus; 260a, 249c.

四

人は精神的高揚の頂點に達する時再び大地を見る事を餘儀なくされる。バイドン、シムポジオン、パイドロスの敎說が如何に美しくあらうとも、それは決して彼を滿足さすものではなかつた。何となれば蒼穹の彼方、かの美しき天外の國(ὁ ἔξω τόπος

τοῦ οὐρανοῦ) を凝視する時彼は忽ち足下の溝に (ἐσ φρέαρ παρὰ πόδας) 墜落してトラキヤの少女に笑はれるであらうから。[1] 單に超越的な ὄν のみを立て之に對立 (ἀντίθεσις) する ἐξ, οὐ を排除する人は直に途絶し(アポレイン)、矛盾 (ἀντιλογία) を超えてディアレクティコースに進み得べくもない。[2] こゝに於てプラトンは上記の困難を救ふ爲に形相說を改造するの必要に逼られた。何故なら、パイドン、ポリテイアの形相說は現象界を說明する爲に採用された一の假設 (ὑπόθεσις) であり、假設は不可能不正な歸結 (τιὰ συμβαίνοντα) に達するなら破壞され (ἀναιρεῖται) 得るのであるから。[3] 斯くしてエレア的批判によつて自說の保持し難きを銳く看取した彼は、最も根本的命題たる知識の τί ἐστιν; の研究から始め、プロタゴラス(ホメロス、ヘラクライトスをも含めて)とパルメニデスとの說を綿密に檢察(ディアクルウエイン)し、よつて以て彼の體系を新しい基礎の上に再建する事を試みた。[4] テアイテイトス以後の研究は實に此爲に捧げられた彼の倦まざる努力の結晶なのである。バーネットの如きは形相說俱有說、想起說等の悉くをソクラテスに歸するのである。其の正否は今暫く論外に置くとしても、テアイテイトス以後の諸篇が其の形式に於て、[5] 用語に於て、[6] 內容に於て、[7] 以前のそれと截然たる區別をなして居るのは確である。

扨、上記 (A) (C) の困難は必然的にエイドスの制限を强ひる。我々は既にテアイテイ

トスに於て議論が判斷(ドキサ)からなる思想の對象に制限されて居るのを見出すであらう。そこには以前の如き,,αὐτὸ ὅ ἔστι,,の敎說は影を沒し、エイドスは、精神が(感官を通してではなく)それ自身によつて(αὐτῇ δι' αὐτῆς)考察し、理解する・κοινά・と交替されて居る。有、非有、同、異、等、一及他の數、等は其例で、之が卽所謂 καταγορία に外ならない。夫故に彼がエイドスを理知的範疇に制限し、之等一定數の操作運用を(ἀναλογίζεσθαι, συλλογισμός)感覺界に擴張して經驗界全體の說明を企てたと解する事に何等の不合理もないであらう。[8]

パルメニデスに於ける凡ての送絕(アポリア)はエイドス相互の結合不可能より由來する。第一の假說の歸結は、エイドスの孤立性の保持し難きを敎へ、第二の假設のそれは、エイドス相互の結合關係研究の必要を敎へる。[9] 實際一のエイドスを全然切離する事は凡てのロゴスの完全な抹殺であり、それは敎養なき非哲學者(アビロソポス)の事である。類(ゲノス)の純粹な孤獨は決して可能でも有益でもない。從つて、我々が哲學を破滅から救つてロゴスを生かす爲には當然類(ゲノス)が相互に結合する本性(κοινωνία ἀλλήλοις ἢ γενῶν φύσις)を有す事を許さねばならぬ。何となればエイドスの結合によつてロゴスは生ずるのだから。[10]

併し互に相反するエイドスが如何にして結合し得るか。如何にして一のエイドスが一而多、同而異、靜而動、となり得るか。バイドンに於てはエイドスと個物との結合が論ぜられ。エイドス相互の結合は無雜作に拒否された。[11] 然るにパルメニデス(ピレボス)では次の如く云はれて居る。

『個物が反對のエイドスを俱有(メテッケイン)する事によつて、等又は不等、一又は多、となる事には何の不思議もない。個人が反對の性質を得て大又は小、重又は輕、となるが如き事は通俗(デデメウメナ)な兒戲(パイグニオウデ)に類する事、否ロゴスを妨げる事である。實際の困難は、寧ろ現實から分離、抽象した普通概念(τὰ γένη τε καὶ εἴδη)自身の間にあるのであつて人が若し、等、不等、一、多、靜、動、等のエイドスを相互の間に於て綜合分割され(συγκεράννυσθαι καὶ διακρίνεσθαι)得る事を示し更に之を存在物に於ての如く思惟の對象に於て(ἐν τοῖς λογισμῷ λαμβανομένοις)證明し得たとせば驚異に價するであらう。[12]』

"κοινωνία τῶν γενῶν"の研究は主としてソピステスの論題である。我々は一方結合を全然否認する者が自殺論に陷り、他方凡ての結合を許す時は矛盾に曝される事を知る。[13] 從つて第三の場合、卽類(グノス)の或る者は結合するが他は不可能である場合のみが殘された。それ故に我々は「事物(オンタ)を類に從つて(κατ' εἴδη, κατὰ γένη)區別し、一のエイドス

を他と同視せず、如何なる類が他と調和(シュンポーネイン)するか、如何なる類が他を受容(デケスタイ)せぬか、更に、混合分離が出來る爲に一切に普通する(διὰ πάντων)類があるか」を探究せねばならない。[14] 彼が曾て沈痛な叫により身を以て護つたディアレクティケーの知識は、實にこゝに成立するのである。茲に於て彼は混亂に陷らぬ爲に所謂最高概念(μέγιστα γένη)有、靜、動、同、異(非有)の五を選んで夫々の性質(ポイイア)並に結合能力(コイノウニアスディナミス)の研究を始める。[15] 之が有名な „Gemeinschaft der Begriffe" の理論なるが、我々は今、此問題には立入らないで、ディアレクティケーを更によく理解する爲にピレボスの初に論ぜられた(而して上述(B)の因難に對する彼自身の解決法とも考へられる)「一(ヘン)而多(カイポラ)」の論に向はう。

元來、一と多、エイドスと個物、との問題は正當に規定されぬ時は一切の難行(アポリア)の原因であるが、美しく規定された時は凡ての易行(エウポウリア)の源泉である。何となれば「一而多」の問題は凡ての命題(ロゴイ)に普遍し、古往今來永久に不死不變な、我々の精神に於ける(ἐν ἡμῖν)命題の πάθος であるから。而して之が解決の最美の道は、神々が人類へ贈つた(ドーシス)而して彼が、(縱屢〻途絕に窮したが)愛した(エラステース)方法である。それは中間の類(εἴδη)を無視して一(ヘン)より直に雜多(ポラ)に赴く ἐρωτικῶς と異なつて中間頃(τὰ μέσα)を飛躍する事なく、一より一歩々々分析を續け、漸を追つて雜多に進む διαλεκτικῶς の道に外ならない。斯くしてデ

イアレクティケーは類(エイドス)が含む種(エイデ)の夫々に付、其の性質(ποιά)限界(ὅρου)のみならず εἴδη の全數及び其の結合組織(συστήματα)をも研究課題とし、之によつて無限な雜多を說明せんとするのである。[16]

併し、彼のディアレクティケーが抽象的な普遍概念を如何に類化、分析しゆくとも到底、特殊的な事實存在には到達し得べくもない。又如何に無限にエイドスを結合するとも決して現實的なものは出て來ないのである。そこには超ゆ可らざる溝渠があり、飛躍す可らざる限界がある。何となれば、主語はそれに屬する凡ての共通述語(κοινά)の單なる共同出會所ではないのであるから。我々はテアイテイトスに於ける知識の τί ἐστιν の研究の結果(由、附隨的にではあるが)「(一)それが κοινά を含む事。(二)事物を知る爲には種差(διαφορότης)を知らねばならぬ事、單なる共通性質(コイナ)の理解はそれを知る所以に非ざる事」を學んだ。從つて我々が事物の具有する凡てのエイドスを知るとも διαφορά を知らぬ限り、決してそれを知り得たとは云へぬのである。茲に彼の晩年に於ける經驗界尊重の由來がある。[17] 我々は、彼が如何にして感覺界を救つた(σώζειν)か、又如何にして叡知界に多樣の屬性を許したか、同時に又眞のイデヤの意味を明にする爲に、後期發展的思想の結實とも考へられる。彼の最も成熟せる著作・

ピレボス篇の存在論を展開しよう。[18]

註

（1）Theaitetos; 174a-b.

（2）Politikos; 286b. 及びソピステス篇に於ける『τὸ μὴ ὄν』の所論、參照。

（3）Phaidon; 100b, 101d, 107b. Politeia; 510b, 511b, 533c. 及び Parm. 136a ff.

（4）H. Jackson; (Journal of Philology vol. X. 253ff.XIII 242ff.)

Burnet; G. P. I. p. 155, 235-6. 242.　Raeder; Platons philos. Ent. s. 280, 336, 423,

H. Fowler; Introduction to Theaetetus, p. 4.　R. G. Bury; The Philebus of Plato, Introduction, lxix-xxi.

尙ナトルプは單に認識論上の見地からテアイテイトスをパイドン、ポリテイア以前の作とするのであるが、かゝる說の支持し難さは論を俟たぬ。(Natorp; Platos Ideenlehre, 2 Aufl. S. 114)

（5）後期の對話篇に於ては、以前の如く、ソクラテスは主人公の役を演じて居ない。唯、ピレボスに於てのみ彼が主話者となつて居るのであるが、之は此篇の主題が『善』なる爲、之を論ずる最適任者としてソクラテスを持來つたのであらう。何故なら、茲に現れるソクラテスには以前の如き生々せる人格的特徵が少しも表れて居ないから。

Raeder; Platons. ph. Ent. s. 354-55.　Burnet; G. P. I. §242. 參照。

尙、後期に於ける特異なる文體、語法等の綿密な研究に就いては。Campbell; The Sophistes and Politicus of Plato; Introduction v. ff. xix-xlii 參照。

又レーダーも特異なる後期の文體（シュティル）は、後期に於ける最初の積極的論說たるソピステスに至つて始めて表れ來ると云つて居る。(Raeder, Ibid. s. 318)

（6）a）例へば『δόξα』なる語は、シムポシオン(202d)ポリテイア(477-79. 511c-e, 534a.)に於ては『臆見』と解せられ、思惟(διάνοια)よりも下位、想像(εἰκασία)と信仰(πίστις)とを包含するものとされたのであるが、後期に於ては思惟（ディアノイア）の結着と定

義され明に『判斷』の意味が表れて居る。

I Theaitêtos; 187a.『我々は有(オンタ)に關し、精神自體のなす作用に附する名前―判斷(δόξαν)の下に於て知識を探究せねばならぬ。』

II Ibid 190a.『思惟(διανοεῖσθαι)とは精神が自身と對話する事であり、それが決定(ὁρίσειν)に至る時、之を判斷(δόξα)と云ふ。δόξα とは無聲のロゴスに外ならぬ。』尙、260c-e. 參照。

III Sophistês; 263d-64b.『δόξα とは διάνοια の結末(ἐπιστελέσματος)である』

IV Philêbos; 38e.『δόξα は聲に出せばロゴスになる。』

b) 次に『οὐσία』なる語は以前に於ては、一般に『本質』の意味に解かれたが、後期に於ては『存在』の意味を有して居る。其典型的例としてパイドン(65d, 78e, 92d.)パイドロス(245e)の οὐσία とテアイテイトス(179d, 185c, 186c.)ピレボス(26d, 27b.)の οὐσία とを比較參照。勿論、其意味の混用され、決定し難き箇所もないではない。尙プラトン哲學に於ける οὐσία の意味に就いては。R. G. Bury; The Philebus of Plato. Appendix F. p. 210-11.

Campbell; The Theaetetus of Plato. 2ed. p. 164. 參照。

然るに、ヤイアーは無雜作に『οὐσία』が essentia と existentia との兩意を含むとして居る。(H. Maier; Sokrates. s. 529.)

c) 『εἶδος』もパイドン、ポリテイア等に於ては、主に本質、自體の意味に用ひられたが、ソピステス、ポリテイコスでは γένος と同義、卽普遍概念の意味に使用されて居る。

(7) a) 『個物をそれの多くの屬性との關係に就いて。』ポリテイア(523a-6b)に於ては、νόησις に至る有用な豫備手段として眞思目に論ぜられ居るに反し、ピレボス(14c-d)では輕蔑されて居る。

b) シムポッオン(211b) パイドン(75d)に於ては、『τὸ ὄν』は不變不動絕對的(アウィカタハウト)にして πάσχειν せず。』とあるに反し、ソピステス(247d-249d)に於ては『ヰイドスの友』の說は排棄され、『ὄν は能動(ポイエイン)、受動(πάσχειν)の能力(ディナミス)也。』と定義されて居る。(248c) 尙『ヰイドスの友』に就いては從來論議の多い所であるが、私はレーダーの說に從つて置く。(Rader; Platons

1354

P. E. s. 327–332. Campbell; Sophistes and Politicus of Plato p. 125, 及び Introduction to Sophistes i lxxiv,ff. 參照。)

c) テアイテイトス(181c–d) パルメニデス(138b–c) では運動(キネシス)の二種が區別されて居るに反し、ポリテイア(380e) では變化(ἀλλοιωσις)と運動(κίνησις)とが同じ意味に用ひられて居る。

(8) Theaithtos 184c–186d. Burnet; G. P. I. p. 257, 263. Campbell; The Sophistes and Politicus of Plato,-Introduction to the S. lxxi, H. Cohen; Platos Ideenlehre und die Mathematik (Cohens Schriften z. P. u. Z. s. 350_{6-10}) 參照

(9) 私は議論紛々たるピレボス($15b_{2-4}$)の說明方に就いて、バーネットと共に ἄπειρον を生かし μέσα と εἴδη とをエンファサイズして、パルメニデス第二の假說(及びソピステス。244b–245d)に結付ける。

Burnet, G.P. I. p. 326, A. E. Taylor; Plato-The Man and his Work p. 411–12.

尙、Bury; The Philebus of Plato P. 13–14, 215–6 參照。

(10) Sophisths; 259d–e, Philebos 63b–c.

(11) Phaidon 102dff. 尙、A. E. Taylor, Plato-The Man a. h. W. p. 388 參照。

(12) Parm. 129a–130a. Philebos 14c–d. ここに表れ來る(Parm. 129d)等、不等、一、多、靜、動、及び「136a–b」にてゼノンに採用された、一、多、不等、動、靜、有なども明にテアイテイトス(185)の『κοινά』である。

(13) Sophisths 251–e, 252c–e.

(14) Ibid. 253b–d.

(15) Ibid. 254cff. ここに取扱はれて居る所謂最高概念もテアイテイトスの『κοινά』に外ならぬ。

(16) Philebos 15d–19b. Natorp, Platos Ideenlehre s. 317–18 A. E. Taylor, Plato p. 412_{1-3} 參照。

(17) Theaithtos 185cff. 208c–210b. 又 Politikos 285b. に於ける διαφορά 及び ἐικεῖον の強調(Natorp, Platos Ideenlehre s. 352 參照。) 更に、ティマイオス(46d–48c)に於ける宇宙(コスモス)の非合理性(ἄλογος)偶然性(τὺχον ἀτακτον)の原因『ἡ πλανωμένη αἰτία』としての『ἀνάγκη』に注意。

(18) シュライエルマッヘル、ツェラー等はピレボスをポリテイアの前に置くのであるが、之に對しては、ジャクソン、レーダー(Platos. ph. E, s. 80, 365)、ビューリー(Philebus of P. Introd. lxxviiiff)によつて充分に反證され、ピレボスが後期の中心思想なる事が確められた。尙Bury; (Ibid. Intro. xxxix, lxix, lxxx), H. Maier, (Sokrates S. 573-4)は之をテイマイオスの後とするのであるが私はレーダーやバーネット、及びテイラーの說に從ふのが正當であると思ふ。ロス (Arist. Meta. I, 170, 171 88-89)はピレボスを後期教說の示された唯一の對話篇也とし之を後期體系の出發點と考へる。

五

常に『ある』(ἐναι)[1]と云はれて居るものは一(ハン)と多(ポラ)とより成り πέρας と ἀπειρία とを自身(エ)の内(ウチ)に本具(σύμφυτον)して居る。從つて宇宙に於ける全存在(πάντα τὰ νῦν ὄντα ἐν τῷ παντὶ)を分析する時、構成的要素(ἐξ ὧν γίγνεται)として二因子を得る。[2] 而して此の二因子はそれ自體としては單に可能に止まり、相互を離れては實現されない。兩原理の綜合により始めて現實的存在となる(γένεσις εἰς οὐσίαν)のである。

(a) 茲に ἄπειρον とは量的無規定[3]を意味し、凡て τὸ μᾶλλον καὶ ἧττον (十一)を受容(デコメノン)れ、之の内住(エンオイケートン)する事を其表徵(セーメイオン)とする。例へば不定なる溫度(θερμότερον καὶ ψυχρότερον)、音、大さ、快苦、等の如き感覺的强度(σφόδρα καὶ ἡμέρα)は、それ自體としては果(はて)を許さず ἀτελῆ, ἀπείρω であつて、任意の點から反對の兩方向(十一)に擴がる實現されない樣態である。從つてアペイロンは生成に必要な質料(ヒュレー)ではあるが、不定なる連續的多樣の可能に止まり、

究竟に於ては存在の基底としての單なる連續に過ぎぬ。併しそれは決して靜的受動的な者ではなく飽迄も變動的な者、ペラスによつて束縛固定され(δεδεμένον)ぬ限り止る事なく常に前進(プロコウレイン)を續けるものである。勿論、自力で始中終を持たぬ如き連續は生成、動搖の可能に止り、現實的生動ではないが、潜勢的者として何にでもならんとする者、否、定量(ポソン)を消失さす(ἀφανίζεν)如き反抗的能力さえ有するのである。[4] 凡て連續的に流動する者(ῥεύματα τὰ πάντα)は徹底的に考ふる時はぇとも τι とも、何とも限定出來ず、"οὐδ' ὅωτως" と云ふ外ないが故に、本來の意味に於て ἄπειρον と呼ばる可きものである。[5] 從つてアペイロンはそれ自體としては云はゞ虛僞の推理によつて(λογισμῷ τινι θίθω)漸く捕へられるものかも知れない。[6] 併し、さればとて μᾶλλον καὶ ἧττον の不定な連續は決して無ではない。何となればτὸ μὴ ὄν も何等かの風に(πως, κατά τι)あり而も其對立者(アン・イデノン)に劣らざる積極性を有するのであるから。[7] それは宛も音程(デアステーマ)に於ける如く ratio に割切れず無限に剩餘の殘る非合理的原理ではあるが存在の礎地となり、より高い原理(卽 πέρας)の容器(エクマゲイオン)云はゞ萬物の母(メテール)であり、生成の乳母(ἡ γενέσεως τίθηνη)である。[8]

(b) 之に對し περατοειδής とは一の度(μέτρον)數(ἀριθμός)の他に對する關係、比(ratio)であり其最も簡單な一般的形式が等(イソン)(1/1)及等性(イソテータ)、二重(デプラシオン)(2/1)である。從つて其の抽象

的內客（τὸ πέρας ἔχον）[9]としては度定量（ποσόν）果が考へられるのであるが同時に規定性（πέρας）としては、不整な無規定の前進を止め（ποιὸν παύειν）之を束縛固定さすものである。それは夫自身靜止（ἔστη）であるのみならず無規定の中に入るや直に動搖を停止（παύειν）し、相互に反對するものゝ差異性を除去して、數の導入によつて均齊と調和とを作り出すのである。更に具體的に云へば、それは生成に必要な本質（ἡ γενέσεως ἀναγκαῖον οὐσία）[10]であつて、過不足に對する基準の本性（ἡ τοῦ μετρίου φύσις）として兩極端の中央に住す可き當爲（τὸ δέον）至當（τὸ πρέπον）適時であると共に無規則、無秩序、劣惡を規正する法則（νόμος）秩序（τάξις）の原理、云はゞ精神の諸部分を結付ける神的靭帶（θεῖος δεσμός）である。[11]

(c) 斯くして無規定は規定を伴なふ事によつて始めて存在となり（γεγενεμένη οὐσία）以て第三の類・μικτόν・を形作る。卽それ自體では單に可能に止まる如き互に相反する兩原理は其結合によつてのみ現實化され、存在となるのである。何となれば兩原理は相依、相關して一は他を豫想し、一がなければ他もないから。[12] 從つて混合は生成の奉仕者たる兩原理から生じた結果、云はゞ父と母との子（ἔκγονον）である。[13] 而して健康、調和、四季、其他一般に美なる者は兩者の正當な結合に他ならぬ。

(d)併し存在(ウーシア)が兩原理の混合なる以上、結合の原因(ἡ μείξεως αἰτία)がなければならぬ。之が所謂第四の類である。凡て生成する者は原因によつて生動するが故にアイティアとは作られ、生成する者に對して、作るものゝ本性(ἡ τοῦ ποιοῦντος φύσις)であり、萬物(タ・パンタ)の創造者(デミウルゴーン)卽理性(ヌース)に外ならない。[14] 何故なら、理性が有限(ペラス・エコン)を導入してアペイロンを規定する時始めて存在が生ずるのだから。それ故理性は、天地(パンシレウス・ウラヌー・カイ・ゲース)の王として、一切の原因と云はれる類に屬し、それ無しでは他の原因も原因たるを得ぬのである。[15] 併し理性は又精神(ブシケー)を棲家(オイキア)とし、精神なしには(ἄνευ ψυχῆς)あり得ない。勿論統制の原理たるνοῦς は精神(ブシケース)の舵子(キベルネテース)ではあるが ψυχῆ に內在し、それを離れては(χωρὶς ψυχῆς)現在し得ぬのである。[16]

然らばプラトン哲學に於て ψυχή とは抑、何であるか。それの τί ἐστιν; に答ふべき學問的說明を我々は何處に見出し得るか。パイドロスに於ける永動者(トー・アエイ・キノトン)の論が正に之に當るであらう。

『他によつて動かされる者は運動を止めるかも知れない。併し自分自ら動く者は決して動をやめない。それは運動の源泉であり、始源である。(πηγὴ καὶ ἀρχὴ κινήσεως)扨かゝる根源(アルケー)は不生でなければならぬ。何故なら凡ての生成者は根源から生ずる

のに之は夫自身が根源であるから。更に之は不滅でなければならぬ。何故なら若しそれが消滅せば萬有は靜止に至るだらうから。而して此の原動(アルケー)が卽夫自身によつて動かされる自動者・『ψυχή』・の本質(ウーシア)であり定義(ロゴス)である。』[17] 同樣にポリティコスに於て、永遠に自己を廻轉さす事は生動せる一切の主・『ψυχή』にのみ許され、ピレボスに於ても欲(ἐπιθυμία)、衝動(ホルメー)、原動(アルケー)が ψυχή に歸せられて居る。[18] 更にノモイでは運動の十種を擧げ其の第十種(自他を動かす者)は他の九種の根源(アルケー)であり、精神にのみ見出されると說いて後、『ψυχή の定義(ロゴス)如何と問はゞ自己を動かし得る運動自體(ἡ δυναμένη αὐτὴν αὑτὴν κινεῖν κίνησις) とのみ答へ得。精神は凡て變化運動の原因(アイティア)なるが故に第一原動(ἡ πρώτη κίνησις)である。』[19] と云つて居る。斯くて存在の原因は欲動の原理 ψυχή に歸せられた。

註

(1) 此の『ἔνια』の意味が問題となる。シャールシュミツドは之を現實的存在のみに制限するに對し、シュナイダーは思惟の對象のみに解す。バーネットやテイラーも『ἄει』を at a given moment, 又は at any time. と譯して現實的存在に解して居る。私は後にも明にする如く 53e の『ἔνια』及びソピステスの 243e₂ ―『ἔνια』更に Phaidon, 79a. Sophisthes 255c, Politikos 285d₂, 等の ἔνια を參照して、之を最も廣義に解し、ピューリーと共に、包括的な『有一般』と考へる。勿論、23c₄ の ἔνια には (νῦν 234c₄. ἄλλη μεγάλῃ, 23b₇ を注意して) 適用しない。

Bury; The Philebus of Plato Introd. lxxiii, p. 211, Raeder, Plat. ph. Entw. s. 37f. 參照。

（2）ティマイオス(48aff)に於てもコスモスはメーネとアナンケーとに分析されて居る。

（3）Baeumker (Das Problem der Materie in d. gr. Philos. s. 194–6) は『量的無規定たる ἄπειρον が一般的根源的質料であつて質的無規定たるティマイオスの χώρα は、究竟に於て之に歸せられ得る。』と云つて居る。

尙 ἄπειρον に就いては。Bury, Philebus of P. Appendix c, D, Ross, Aristotle's Meta. I. Introd, lvii 參照。

（4）Philebos 24c–d 私はプラトン哲學の質料を單なる『空間』の如きものであるとは考へない。何となれば、上述の如くピンボスのアペイロンは『連續』を意味して居り、而も『空間』は『連續』の一の相ではあるが、それの本質的なものではないから。ティマイオスに於ても『θάτερον』や『ἀνάγκη』や『ὑποδοχή』(之等の關係に就いては、ここでは論議しない。) は反抗的、激動的、性質を有し、單なる『空間』とは考へられない。35a.『混じ難き(δύσμεικτον)異の本性を强制的に(βίᾳ)同に結付ける。』(ピンボス 27a,「束縛されたアペイロン、云々」參照。) 48a,—(メーネは ἀνάγκη (πλανωμένη ἀιτία) を說明する。)『快せる。』56c—『有益的に說服された(ἐποῦσα πειθοῦσα)アナンケーの本性。』52eff 恰も震動を性とする器械の如く、動搖して居る容器(δεξαμένη, κινουμένη)。』『激動して(σείεσθαι)至る處に、不規則に動搖する(παλαντουμένη)形相の受容者。』『不定なる足跡(ἴχνη)を示す。』等々參照。(尙ナトルプは blind wriken, willig wirken とゐひを說明して居る。)

（5）Theaithos 152d, 182d–183b Natorp, platos Ideenl s. 110 參照。(尙ピンボス 27e–8a, 53c, 54d から『ἄπειρον = ἀεὶ γένεσις。』の式を得。) A. E. Taylor, Plato, p. 414$_{45}$–7 參照。

（6）Timaios 52b 尙ソピステス(254a)に『非有は場所の喏その爲に(διὰ τὸ σκοτεινὸν τοῦ τόπου)認知し難い。』とある。

（7）Sophisths 240bff, 257b–258e. ἄπειρον と μὴ ὄν とを同視する事に就いては、メーネット(G. P. §247)が充分な證明を與へて居る。又ティラー(Plato; The Man and his Work, p. 511 commentary) は『連續分數の無限性が μᾶλλον καὶ ἧττον と μὴ ὄν との同一を明にする。』と云つて居る。

（8）Timaios 49a 52d.『法則や理智なくして、常に不秩序な偶然的者(τὸ τυχὸν ἄτακτον)を作り出す限りのもの。46d–e』『それによつて自然が齎らされるところの偶然的原因の種類(τὸ τῆς πλανωμένης εἶδος αἰτίας, ᾗ φέρειν πέφυκεν)。』Tim. 30a—『ἀταξία』

53a.『ἔτγε, ἀλογίστου καὶ ἀμέτρου Politikos 273bff.『ἀκαλίας, ἀναρμοστίας』等參照。

(9) πέρας と τὸ πέρας ἔχον とは區別せるべき言葉なるも、プラトンは之を混用して居る。ロスは此の類(グノス)に於ける作用と內容との兩方面の意味を明に認めて居る。(Ross, Arist. Meta. I. p. 170-171)

(10) Politikos 283d. ここの οὐσία の解釋に就いては。Campbell; Soph. and Polit. of P. p. 101 の註を參照。尙、テイラーは此の οὐσία を『the standard of being』と譯して居る。

(11) Politikos 283c-4c, 309c. Philebos 26b

(12) Politikos 284d

(13) Philebos 26d. Timaios 50c-d.

(14) Philebos. 26c-27b.

(15) Ibid 30c-d. (Phaidon 99b 參照。)

(16) Ibid. 30c, 63d. Timaios 30b, 46d(5-6), (Sophistes 249a)

(17) Phaidros 245c-e.

(18) Politikos 269e, Philebos 35d,

(19) Nomoi X 893bff., 894c-896b,『ἀρχὴ κινήσεων πασῶν καὶ τὴν πρώτην』『πρωτὴν γένεσιν καὶ κίνησιν』

六

扨、此四綱目の何れにイデアが屬するかは特に興味ある問題なるが同時に又困難な問題であつて、古來屢〻烈しい論戰が繰り返された。傳統的にはイデアは πέρας に代表されて居ると考へられて居た[1]がジャックスン出でゝピレボスのイデアは普通の

イデアではなく改造された後期教説のイデアであるとの見解の下に、之を混合の類に配當し劃期的研究によつて、我々に新しい道を開いた。[2] 勿論、彼の説は個々の點に於ては多くの非難があるであらう。併し後期教説の特徴がイデアの中に質料的要素を許した點に存するとする批判家達の所論が合理的であるならばイデアが何等かの意味に於て混合の類に屬す事は承認されねばならぬ。而して此事は正に原文から(縱明にではなくとも)合法的に引出される事なのである。[3] Bury や Ross も其の他の點では Jackson に反對するが、事實存在の構成がイデアの構成に暗示を與へ、イデアがそれに類推的要素から成立して居る事は是認して居る。[4] 實際後期に於ては綜合、統一の思想は強く表れ、特に重大な役目を演じて居る。例へば當篇で善が第三類に歸せられ居ると共に、ソピステスでは有は動靜の μεικτόν 也とされ、ティマイオスでも「同と異、常に同樣なる本質(ἀεὶ κατὰ ταὐτὰ ἐχούσῃ οὐσίᾳ)と生動する感性的者、との混合が第三の οὐσία の類・μία ἰδέα 也」と云はれて居る。[5] 更に我々がアリストテレスの援助を借るならば、形而上學 A・六、は『プラトンがイデアの中に要素(本質 οὐσία として τὸ ἕν・質料 ὕλη として τὸ μέγα καὶ τὸ μικρόν)を認め之が又萬物の要素也とした』事を教へる。[6]

併し、他方ピレボス所論の中心たる混合が事實存在なる事は明瞭である。從つて

イデアを直に四綱目の何れかと同視する事は正當を缺き、其結果ピレボスの形而上學と以前の形相說との間に明確なる關係を發見する事は不可能である。思ふにプラトンは古き所說に煩はされる事なく、有(ἔναι)の新しき分析を提出し、之によつて現象界並に叡知界の包括的說明を企て(而も中途例の如く岐道に走つて)前者のみの解明に終つたのであらう。それ故『著者の思想を比較し、云はゞ彼自身よりも、よく理解する事(besser zu verstehen)[7]は我々に殘された課題(ἀφεῖσαν ἐν κοινῷ ζητεῖν)であり、同時に又問題自體よりも遙かに方法(イトドス)を尊重し、それの第一義(プロートン)を主張した彼の遺志でもあらう。而して我々はかゝる見地の下にピレボスのイデアを考察するのである。

バーネットはπέρας の類をバイドン、ポリテイアの形相(フオームス)に關係附ける事の正當さを承認して居る。[8] 私は後述の如くεἶδος(γένος)とἰδέαとを區別しεἶδος・卽バーネットが眞のPlatonic formsと考へた者をπέρας の類に屬せしめる事が適當であると思ふ。成程、ピレボスに於けるπέρας の例は單に數量的規定に過ぎぬ。併し、一般に質的な者は量的に還元され得る故、之はπέρας の內容の究竟的、典型的範例とも考へられる。何故なら此篇に於てπεραστοειδής は單に「非合理的な・μᾶλλον καὶ ἧττον・と兩立せず、之の反對を受容れる者」と消極的に定義され居るのみであるから。更に我々がテアイテイトスに於

て等、一(イソン・ヘン)及他の數(アリトモス)が κοινά として、有、非有、同、異、と同列に擧げられて居る事。ソピステス、テイマイオスに於ける數の資格、ポリティコスの οὐσία 等を注意するならば πέρας の類が純粹概念(ἃ αὐτὴ δι' αὑτῆς ἡ ψυχή) たる κοινά や・μέγιστα γενη・を包括するとしても何等差支ないであらう。[9] ナトルプも πέρας はエイドス、ゲノスの、より鋭い限定に過ぎぬと云つて居る。[10] 斯くして κοινα としてのエイドスがペラスによつて代表され得るとせば純粹な(ἄμεικτον, εἰλικρινής) 知識は此段階に於て、成立すると云はねばならぬ。

我々はパイドン七五Bに於て(尙素朴的ではあるが)アプリオリの出生地を見出す。[11] そこに於て、エイドスは認識の根據と考へられた。而して我々は、かゝる εἶδη がテアイテイトスでは κοινά と改稱され、更にソピステスではそれ等相互の結合によつてロゴスが生ずと說明されたのを見た。從つてかゝる知識はエイドス・卽常に同樣にして就中不混合なる者(ἀεὶ κατὰ ταὐτὰ ὡσαύτως ἀμεικτότατα ἔχοντα = πέρας) に關するが故に最も嚴密、確證的(アクリベス・ベバイオス)にして明晰(サベス)且純(カタロス)眞(アレデス)である。併しそれは必ずしも、充分且完全な (ἱκανός, τέλειος) 知識とは云はれない。[12] 何となれば單に叡知界のみを立てゝ、下手(パウロース)に哲學(デ・アトリボンデス・エンピロッピア)する者は、遙か天空を見詰めて、目前の溝に落込んだタレスと同じ運命に陷つて、トラキヤの下女の笑を招くであらうから。其事由(わけ)は、彼等は人間一般 (τί ποτ' ἐστ-

τὸν ἄνθρωπον;) を知つて個人を知らない。天上の事を知つて足下の事を知らない。夫故、卑近な事を云ふ時、不經驗(ἀπειρία)の爲に一切の溝やアポリアに陷つてトラキヤの人のみならず凡ての人に笑を供するのである。[13] 從つて我々が家路を出さん爲には、神的知識(ἡ θεία ἐπιστήμη)の外に人間的知識を認め兩者を、かのホメロスの詩的な『溪谷の容器(ἡ μισγαγκεία ὑποδοχή)』の中に合流せしめねばならぬ。[14] バーネットが二十年の努力研究によつて明にした如くプラトン哲學は決して從來考へられた如く絕對的二元論ではないのである。彼に「現象を虛妄也と言表し、不合理、不規則を感覺界の缺點に歸す事によつて困難を逃避する如き」怠慢な企は少しもない。彼の全研究は寧ろ、それを「救ふ σώζειν」にあつたのであり、感覺界を次第に叡知的にする事がテアイテイトス以來の目的であつたのである。[15]

私は之を理解する爲に πέρας の作用的方面に着目する。我々は變動常なく禦し難き τὸ ἄπειρον = X に πέρας = A, B, C, を導入して之を停止し、其の多樣性を規定して同樣性とし、以て知識の對象となし得る。何となれば ἄπειρον の可測定性(μετρητή)は μὴ ὄν と同樣に許されたのであるから。[16] 從つて非合理的原理(X)に規則性(A,B,C,)を當嵌めて ratio に化し、云はば unkundig の意味の ἄπειρον に學の基礎たる數及び關係の規定を與へ

て認識の對象となし、次第に現象界を救つて知識の領域を增す事が出來るのである。[17] 斯くして知識の充全有益(ὠφελιμος)を期する爲に確實と純粹とを缺ぐ之等經驗的知識を、かの神的知識に投入して、宛も織匠術(ἡ ὑφαντικὴ)に於て縱糸と横糸とを編み合す(συμπλεχειν)如く、之等を正當に混和し、よつて以て對象界全體を理解せんとした。

併し、此の神的知識と人間的知識との關係は如何。如何にして前者が後者と結付くか。之に對して、彼は何等の解答をも與へない。更に又 ἄπειρον が本來無限なる連續である限り、如何に測定の過程を續けるとも、到底規定し盡さぬものがなければならぬ。如何に合理化を行ふも ratio になりきれず無限に割り切れぬ剩餘が殘らねばならぬ。[18] 從つて我々は、こゝにも尙超ゆ可らざる一の溝渠を見出すのである。

註

(1) Brandis, Steinhart, Susemihl Rettig Teichmüller. (Bury; The Phil. of P. Intro. lxiv)

(2) H. Jackson; Platos Later Theory of Ideas (J. of P. X. 253ff.) 卽彼は『ピレボス二四C ἐν (=τὸ) ποσόν τε καὶ μ[έ]τρον』の τε を强調して ποσὸν τὸ μέτρον τὸ を區別し、前者をアリストテレス (Metta. 987b20–30 τὸ ἓν καὶ τὰ ἀρίθμοι) の ἀριθμοὶ に、後者を εἶδος に配當して、個物が ἄπειρον(卽、Aristoteles, の τὸ μέγα καὶ τὸ μικρὸν) を ποιοῦν とより成るに反し、イデアは ἄπειρον τὸ μέτρον、との混合也と主張する。彼によれば、剴切な ποσὸν が μέτρον であつて、イデア(例へば健康)と現實的存在(例へば病氣)との差は、πέρας の基準なるか、それから偏れるかに存し、兩者の關係は典型(タイプ)と模倣者(ミメシス)との間の類似に過ぎない、と言ふのである。併し此說は既に Bury, Taylor, Ross, 等によつて嚴しく論駁され、明な反證が擧げられた。例へばヒレ

ポス(25c-6b)に於て、病氣、氣候不順、劣惡等は ἄπειρον として取扱はれて居る事。アリストテレス形而上學(A・六節)は、數をエイドスと同視して居る事。個物とイデアとの關係もピタゴラス學徒の說く如き、單なる類似(ミメシス)ではなくして、アリストテレス(Meta. 987b14)が確めて居る樣に、課題として世界の前に殘し(ἀπίστεις)たものであり、ピレボス篇は其の關係に付、直接な表示を與へて居ない事。等々。

(3) Philebos, 23b, „ἰδέαι", 64a,『ἰδέα=ἀγαθόν』 65a, τὸ ἀγαθὸν (第三類としての)。

(4) Ross, Arist. Meta. I. p. 165; Introd. lxvi, lxix,17-8. Bury, The Philebus of P. Introd. p. lxxi-xxiv? 尙ビューリーは、後期に於ては俱有說(μεθεκτὸν)說が排棄されて混合說が(μῖξις, κρᾶσις)がとられたとさえ主張する。

(5) Sophistbs. 254d, (249d) Timaios 35a (Natorp, Platos Ideenl. s. 362 參照)

(6) Aristoteles; Meta phisika A. 6 987b18-21 勿論此の證言は後期思想の一般的傾向を指示せるものと、みる外はない。(尙アリストテレスが所々に批判して居る『エイドスの說』に就いて、之を直にプラトン自身の教說と同視する事には多くの危險を伴なふ。我々は、「プラトン」の名によつて彼に歸せられて居る說すら、愼重に考慮せればならぬ事を屢〻先人から注意されて居る。)

(7) Kant, Kritik der reinen Vernunft, (Verl. Cassirer Bd. 3.) s. 257

(8) Burnet, G. P. p. 332 之に對し人は、『ヒイドス(中期に於ける)は個物を離れてあり、πέρας の如く現實存在に內在するものではない。』と言ふであらう(例へば H. Maier, Sokrates s. 530)。併しバーネットはパイドン後半の形相が內在的なる事を主張する。(Ibid., p. 166, 317) Phaidon 74d, 102b-e, 103b 104b 尙 H. Cohens Schriften z. Philos. u. Z. I. s. 643-7 參照。

(9) Sophisths 286b-(ἀρθμός) Timaios 53b-『ἕδεσί τε καὶ ἀρθμοῖς』 Politikos 284d-(δόσεις)

(10) Natorp, Platos Ideenl. s. 326. 尙、Baeumker, Das Problem d. Materie i.d. gr. philos. s. 196n-26, Ross, Aristotle's Meta, Introd. lxix 參照。

(11) Phaidon 745–75bff. 『我々は等自體を見た事はない。併し若し我々が感覺から生ずる等を、かの等自體に關係づけ得たさせば、感覺を始める前に等自體の認識を獨人で居たのでなければならぬ。我々が石や木を等しいと見るのは、等自體によつてである外はない。』云々。尙コーンは徹底して、τοῦτον ἐξ οὗ ἐξῃφθῆναι を musste in uns irgend woher *entsprungen* sein と譯して居る。Cohen, Platos Ideenl. u. d. Math. (Cohens Schriftee z. P. u. Z. I, S. 346)

(12) Philebos 55c–59c, 51e–62b 『ἡ (ἐπιστήμη) περὶ τὸ ἓν καὶ τὸ ἴσον καὶ τὸ κατὰ ταὐτὸν ἀεὶ πεφυκὸς』尙ソノニ出て來るἀκρίβης, ἔμβαιος, σαφὴς 等の概念に就いては。Taylor, Plato–The Man and his Work, p. 430$_{18-21}$ 參照。

(13) Theaithtos, 173c–175b

(14) Philebos 626–e, Homer Iliad. IV. 452ff., テマイオスに於ても、合理的者としてのヌースの外に非合理的者、偶然的者としてアナンケーを立てゝ居る。

(15) Burnet, G. P. I. §267, §268, §262 彼は主として、テイマイオスの天體の研究から之を確めて居る。尙 Campbell, The S. and P. of P. Introd ii–iii Introd. to. P. liii Raeder, Platons ph. Entw. s. 288, 334. Bury, The Philebus of P., Introd. lxxi, P. 211 參照。

(16) Politikos, 284 b–d

(17) (Sophisths, 283b) Notorp, Platos Ideenl. s. 319 Bury, The Ph. of P. p. 204, 207. テイマイオスに於ても、ヌースはアナンケーを說服し、支配する。とされて居る。

(18) 私は興味深い次の言葉に注意する。『不可分な線(γραμμὴ ἄτομος)。』『線の起源は點の流動(ῥύσις)である。』(線は點を加へ合はす事によつては生じない。唯流れる事によつてのみ生ずる。Aristoteles Meta. 992a$_{22}$. Ross, Aristotle's Meta. Introd. lxvi, Burnet, G. P. p. 322. 參照。)

私は眞のイデアはかゝる抽象的な普遍概念でも、それの實體化(ヒポスタシズ)した者でもなくて具體的な實在であると思ふ。カントも云つた樣にプラトンのイデアは悟性概念を遙に超えた(weit übersteigt)ものであつて(バーネットの云ふ樣な)單なる範疇の如き者ではない。[1] 私は眞のイデアの意味を明にし且又『誇張した言葉(hohe Sprache)に緩和的解釋が可能である』事を察知する爲に『かの崇高(エルハーベネ)な哲學者(フィロソーフ)が彼の表現に結付けた意味を確む可く、少しく文獻的研究に』立入らう。

『彼の敎說の主觀的側面に注意して、其の觀念論的被制約性の認識論的價値を輕視しない人は、著者の意識に於ける、卽展開された思想に調整的に隨伴する彼の自己判斷に於ける ἰδέα と εἶδος との區別を明にする努力をやめぬであらう。[2]』(特に後期に於て) εἶδος が類概念を表し γένος と交替されて居るに反し、ἰδέα は複數で表れる事は稀で、其の中には尙 ἰδεῖν なる根源的意味が脈搏つて居るのである。勿論兩語は屢混用されては居るがプラトン哲學に於ける ἰδέα は εἶδος 以上のものであり、[3] ἰδέα が εἶδος と交替されても εἶδος が ἰδέα に代用されて居る事は殆んどないのである。私は〝ἰδέα〟が使用されて居る多くの箇所に於て、それが直觀(先天的思索を通じて物の本質、目的への洞徹)の生きた作用の意味を含蓄して居る事を認知する。

既にエウティフロンに於て ἰδέα は ἀπεόβλπων と結付いて εἶδος と區別され、クラティロスでも最初 εἶδος が梭(クルキス)を造る際に見る職人の內的形像として用ひられ、其の概念が說明されて後に決定的に ἰδέα が表れて居る。[4] 次にパイドロスでは精神(ゴシケイ)の本質(ウーシア)及定義(ロゴス)を與へて後に、その ἰδέα に關しては尙『ὧδε λέκτεον』とあり、更にテアイティトスでは雜多な感覺を構成統一する原理としての μία ἰδέα が精神自身(ゴシケイ ヂウテー)と名稱されて居る。[5] 又二〇三e」でも ἰδέα は εἶδος と區別されて居り(εἶδος, ἰδέαν μίαν αὐτὸ αὐτοῦ ἔχον)[6] ソピステスに至れば「二三五d」でそれは既成の類概念 εἴδη と分たれ、更に「二五四a」に於ては明に知的直觀の意味が出て居る。(τῇ τοῦ ἀεὶ ὄντος διὰ λογισμῶν προσκείμενος ἰδέᾳ)[7] 最後にピレボスでも「一の直觀によつて (μια ἰδέα) 善を狩る。」と云はれて居る。[8]

斯くの如くの中には其の本源的意味として、觀照の生々せる作用が脈搏つて居るのであるが『著者の概念決定の不充分により、屢陷つた不本意な言表』[9]が禍して遂に單なる對象、否超越的實體とさえ解さるゝに至つたのである。[10]

私は、更にイデアの具體性を明にする爲に再びピレボスに立ち歸らう。上述の如くイデアは何等かの意味に於て混合(ミクトン)であり、而もピレボスに詳說された如き現實的(レアール)混合(ミクトン)でないとすれば、それは次位(オルドヌング)を異にする混合、卽理想的(イデアール)混合(ミクトン)でなければならぬ。

而してイデアが『限定された連續』であり、其中に何等かの風に質料的要素を許す限り、それは最早純粹(アイクトン)な形相ではあり得ない。そこには既に非合理的な原理が(基底として)横たはつて居り定義されたエイドスの外に、規定されぬ ἄπειρον が、ὄν の外に μὴ ὄν の原理が取り入れられて居るのである。[12] 斯くて、イデアは現實的混合の典型たり、規範たるが如き、互に相反する二原理の理想的統一なのである。それはエイドスの如く理性の對象として概念的に知られる者ではなくて理性(ヌース)によつて直接に觀られる者、[13] 否觀つゝある者である。勿論かゝるイデアは我々を離れてあるのではないが故に、イデアを觀るとは現實的混合の中に隱れた「本來の統一」の呼覺(パラカレイン)に外ならぬとも考へられるであらう。兎に角私は眞のイデアはエイドスの如く「思惟に於てあり、思惟の制約を受くる單なる內容・υἰώματα」ではなくして具體的な實在でなければならず、凡て現實的、個性的な者の根源は茲にあるのだと思ふ。從つてかゝる意味のイデアは當然 "ἐπέκεινα τῆς οὐσίας" なる善のイデアでなければならない。[14] 善は美しく混せられたものゝ中に(ἐν τῷ μεικθέντι καλῶς)本來の住所(オイケシス)を有すが故に完全(τελέον)充足(ἱκανόν)何物をも要しない。之こそ最も氣高い實有(ウーシア)であつて、一切の生動(ゲネシス・キネシス)はそれの爲に(τοῦ χάριν, τὸ ὄν ἕνεκα)起るのであり、現實的混合(ミクトン)は πέρας を手段(パルマコン)として善の地位に(ἐν τῇ

τοῦ ἀγαθοῦ μοίρα)ある實有の爲に欲動するのである。凡て現實界は缺乏せる欲望(ト・アエイエピエメノン)の世界であつて我々は云はゞ、かの美しく(カライ)善き(アガタ)少年の愛人(エラスタイ)である。[15] 卽、それは最も完全、充足なるが故に本來の意味に於て合目的なのである。何故なら『teleological』は τέλειον から由來し、τέλος(外部目的の意を含む)からは、直接に由來しないから。[16] それは一切(パントス)の根源(アルケー)たる無假定者(τὸ ἀνυπόθετος)として『宇宙的並に可思的(ノエートン)者の究竟の基礎づけをなす終局的統一者』なるが故に、若し之を太陽(ヘリオス)と譬ふれば πέρας は之に赴く道標(エピバシス)であり、我々を照らす光(パオス)とも考へられよう。[17] 從つてエイドスは之を本然の歸趨として目指して居り『凡ての思惟も、一切の生成、存在の永久的、究竟的、總括的、目的其者の觀照に留まり安らふに非ずんば空虛(アイテル)なる人間(メンシエン)の機智(ウイツツ)に過ぎぬ。』[18]のである。エイドスは生きた具體的のイデアから考ふれば、それの單なる影に過ぎない。ソピステス[19]にもある樣に完全な有(τὸ παντελῶς ὄν)はエイドスの友(εἰδῶν φίλοι)の說く如き『常に同一な不動の自體』ではなくて、精神(エンプシケー)に於て、力(ディナミス)動、生命(ζωή)及び神聖なる νοῦς を持つ者でなければならぬ。それは本質であるのみならず生きた作用其者であり、從つてかゝる實在は、宛も小兒の願の如く動かずして動く者(ὅσα ἀκίνητα καὶ κεκινημένα)であるかも知れない。

然らばかゝるイデアは如何にして觀られるか。[20]『ὄν は場所(ディアト・ラムブロン・テース)の明るさ(コーラース)の爲に、觀

る事は容易ではない。何となれば人々の心の眼(プシケースオンマ)は神的な者を眺めるに堪へ得ぬから。[21] 夫故、我々は宛も日蝕觀察者が眼を害されぬ爲に水中に於て其映像をみる如く、精神が盲にされぬ爲にロゴスに逃れ、其中に於て有(オン)の眞相を考察せねばならぬ。[22] 何故ならロゴスは有の表現(δηλωμάτα τῆς οὐσίας)であり最美最大の有はロゴスによつてのみ演示され得るから。[23] 從つてロゴスに於てエイドスを考察し推理(ディアノロギスモーン)によつて有(オントス)の本質直觀(イデア)に沒頭(プロスケイメノス)せねばならぬ。我々がロゴスに於て一の答から、より根本的な問へ、一の假設(ヒポテシス)からより根源的な他の假設へ、かのディアレクティケーの過程を辿りつゝ、精神の裡なる無言(シゲー)の對話(ディアレゲスタイ)によつて、自覺の絶えざる深化を續ける時、[24] 云はゞ蒼穹の彼方を凝視せる眼を轉回して深く內を省(み)、心の純化(カタルシス)に努めて心無罪礙なる時、外(エン)ボロー つ國の泥濘(バルバリコー)に埋(カトローグメノン)もれし『心の眼(プシケースオンマ)』は忽然(エクサイプネース)として、驚異すべき、かの充全なる者(ἰκανόν=τὸ γαθόν)・μία ἰδέα を觀るのである。[25] 併し、上記の如く一切の究竟的統一としての完全なる有は、生きた具體的實在なる限り、概念的知識によつては掴み得ぬ者がある故に、彼はエイドスによる論理的研究の盡くる所、διαλεκτική の最後の段階に、μαντεία による直覺的方法を許さねばならなんだ。[26]

要之、眞のイデアは抽象的概念(エイデ)でも、又單なる本質でもなく、生きた動其者でなけれ

ばならぬ。それは概念的に推理された超越的實體とは異なり、何處迄も內在的な者、自己の內に具有する本源的な美しき統一である。勿論、彼の全著作中にはイデアが超越的實體なる如く解され得る箇所もないではない。[27] 併し其時、我々は彼が彫塑的(プラスティック)性豐かなる希臘(ラス)人なりし事、殊にプラトンが偉大なる哲學者であつたと共に勝れたる詩人であつたと云ふ事を忘れてはならない。思ふに、彼の詩人的な『心の眼』は、宛もテニソンが自己の意識の深き底に圓融無碍な無限(バウンドレス)の實在を體驗したるが如く、[28] ありありとイデアを直觀し、而して之を餘りに美しく、餘りに生き〳〵と觀照したが故に、彼は自らを忘れて此の者が眞に存在し、永遠の生命を有すと信じたのであらう。[29]

註

(1) Kant, d. Kritik r. Vernunft. verl Cassirer, S. 256, (257 Anmerkung) Campbell; The Soph. and Polit of Plato, Introd to P. xv, xx. (空漠たる論理的操作に代用するに具體的なるものへの努力。"stuggle towards the concrete"

(2) Cohen, Platos Ideenl. u. d, Math. (H. Cohen; Schr. z Ph. u. Z s. 374)。(Natorp, Platos Ideenl. s. 1-3.)

(3) Liddel and Scott, Greek-English Lexicon, p. 692, ἰδέα, II. 2. 參照。私は特に後期諸篇では μια δέα ἐν εἴδει(=γένει)ᾳ の區別が明に表れて居る樣に思ふ。尙、アリストテレスは兩語を同義に解して居るのであるがロスは Gillespie の說に同意して此區別を認めて居る。(Ross, Arist. Meta. I. p. 160. Introd. xlviii)。又 Campbell によれば、『一般に εἶδος が論理的意味を有するに對し ἰδέα は統一(ユニティ)の意味を含蓄し、形而上學的意味を有す。(Campbell, The Theaitetus of Plato, Appendix D. p. 267-9, p. 219, The Sophistes and P. of P. Introd. lxviii)

(4) (Euthyphron. 6d–e, Kratyros 389b–e

(5) Phaidros 245e–6a$_3$, Theaithtos 184c–6c.

(6) Schleiermacher (Platons Theaitetos, reclam s. 136) は ἰδέα を Wesen und Gestalt. εἶδος を Gattung と譯し H. N. Fowler (Plato–Theaitetus, Sophist p. 231) は ἰδέα を Form. εἶδος を concept と譯して居る。

(7) 『常に推理によつて有(オントス)の直觀(イデア)に徹身する。』

(8) Philebos 65a, 尙上記(Parm. 134b–c)にてもイデアとエイドスとは區別して用ひられて居る。

(9) Kant, K. d. r. V. (Verl. Cassirer) S.257.

(10) 併し イデアが縱 εἴτως ἰδέα と言表されてゐて それは大概 ἰδεῖν, ὁρᾶν, βλεπεῖν, θεᾶσθαι, νοεῖν. 等と結合して居り 精神の作用から全然獨立したものではない。パイドロスに於てさえ かの天外の國(ὁ τόπος ὑπερουράνιος) は何等 超越的實體と考へる理由はなく 寧ろ純粹思惟の國と同視すべきである。何故なら それは理性によつてのみ(μόνῳ θεᾷ νῷ) 247c, 見られるのであるから。(Burnet, G. P. p. 167)實際 中期の教說と雖もアリストテレスの解した如き乖離(χωρισμος) 的獨斷論でない事は 殆んど凡ての研究家の承認する所である。(H. Maier, Sokrates, s. 529$_{32-34}$ 528, Bury, The Philebus of P. p. 205)。コーヘンは主として ポリテイア篇のイデアを數學的者との關係を研究する事によつて アリストテレスの誤解を明にして居る。(H. Cohen, Platos Ideenl. u. d. Math–Cohens Schr z. P. u. Z. s. 344–7, 356ff.)。

(11) Burnet, G. P. p. 332(21)

(12) 併し 結局は やはりペラスゲアンの方が優位であり スースはアナンケーを説服し(πείθειν) 支配するのである。(Tim. 48a)

(13) διάνοια と νοῦς との區別に就いては。Politeia 511d–e, 533d–534a 參照。併し兩語は屢混用されて居る。

(14) 善のイデアの超越性に就いては。Politeia VI., Philebos, 及び Cohen, Platos Ideenl. u. d. Math (Cohens Shr. z. P, u. Z.) s. 358, 363ff, A. E. Taylor, Plato–The Man and his W., p. 417$_{12-15}$ 參照。ポリテイア (508e)に於ては『善は知識及び眞

理の原因(αἰτία)である。』と云はれ、五〇九Bでは善に創造的性能が與へられて居る。又ヒッポスに(65a, 66a)於ても、眞理及び知識は善の下位に置かれてある。66aff. の善に就いては、Bury, The Phil. of P, Appendix B. p. 169–178, Taylor, ibid. p. 43參照4(尙、ヒッポスの善は必ずしも人間の善のみに限られて居るのではない。例へば六四Aに於ては『人間及び宇宙に於ける一つの ἀνθρώπῳ καὶ τῷ παντὶ—善』が問題になつて居る。此の事に就いて、我々は ἀγαθόν と τἀγαθόν とを區別してみる必要がある。) 終に、私は、プラトンがアカデミーに於て最後迄『善の講義』を續けて居た、と云ふ事を附言して置く。 (A. E. Taylor, Plato, p. 508, Ross, Arist. Meta., Introd. lvii)

(15) Philebos, 61a–b, 20b–e, 67a 53d-4c 尙 οὐσία なる語は上記(第四節註六)に意義の外に「實在」と云ふ意味を有し、後則に於ては屢〻此の意味に用ひられて居る。其の典型的な例としてヘモイ(895d)に於ける、ロゴスと區別された οὐσία を擧げて置く。

(16) Burnet, G. P. I. p. 346 註參照。

(17) Politeia 506e–511e.

(18) Cohen, Platos Ideenl. u. d. Math. (Cohens Schr. z. P. u. Z.) s. 363

(19) Sophisths·243c–49d 尙、ヘモイ(895c)に『自己を動かす事を生(ζῆν)と云ふ。』と定義してある。

(20) ソクに於ては、我々は最早彼の詩的表現に倣つ外はない。

(21) Sophisths 254a

(22) Phaidon 99dff. Parm, 135e, Aristoteles, Meta physika $987b_{30-31}$

(23) Politikos 286a, (Sophisths 261e)

(24) Politeia 510b–11b, 533c, (534c 本質に從つて・κατ' οὐσία・ 努力し作ら善のイデアに進まれはならぬ。) Theaithtos 190a (Sophist(hs 263e)

(25) Politeia $515c_{6-7}$, 533d,527cff. Symposion $210e_4$ (尙 οὐσία の性質に就いては、ベルメニデス 156dff. 參照。) Phaidon

101e,—『充分なるもの・ἱκανόν・に到達する、まで……。』

(26) Philebos 64a, Bury, The Philebus of Plato, p. 153-4. 又 Philebos 64e,（善の δύναμις が美の φύσις に逃込んだ云々）参照。

(27) 有名なシムポッオンの一節(211a-b)の如きは其一例であらう。マイアー(Sokrates, s. 530)等も(勿論、ヰイドスとイデアとを同視して)内在説に反對する有力なる引用箇所として、こゝを擧げて居るのであるが、私は之を單に、所謂"Blütezeit"に於ける詩的表現に過ぎぬとして學問的に重要視しない方が正當であると思ふ。尙私は「此の節と全く對立する箇所のある事」(例へば、Phaidon, 104b 9-10 Sophisths 248c, 249a, 250b, Politikos 307c 等。)而して後期教説を重んずる者には、彼の恐れる『Marburger Platoauffassung』は左程物騒な歸結(unheimlichen Konsequenz)ではない事。」を附加して置く。(序に云へば、Schneider や Tocco はヒッピオス篇に於て νοῦς が最も適當なヰイドスの場所・τόπος εἰδῶν・と考へてヰイドスの内在説を取り、ビューリーも或程度迄之を認めて居る。 Bury, The Phil. of P. Introd. lxvii-xviii, lxxii)

(28) W. James, The Varieties of Religious Experience p. 383-4 Commentary.

(29) 私は、所謂、想起説(アナムネシス)や精神先在説は、こゝに(詩的性格)其の根據を置くのだと考へる。何となれば、かのブレイクが自らの詩に就いて屢語れるが如く『直に神の言葉を書取るものなる故、現實にかへつて冷靜に反省する時、己の作には自らも解き難き多くの謎を含む。』のであるから。尙ライプニッツ(Discourse on Meta., tr. by Montgomery XXVI-VII)は先在説を排して想起説のみを承認するのであるが、ナトルプ(Über platos Ideenl. s. 20-25)は、此兩説は當時の神話的形而上學に基き主張された心理的解釋に止まり、之によつて論理的に定立せるヰイドスを基礎づけんとするものに非ざる事を主張して居る。而して後期教説のヰイドスに注意すれば此のナトルプの主張は、大體に於て、承認せればなるまい。

一九二九・一・一五。